# 第3章：風水の凋落と復活──再び“氣”が設計に宿る時代へ

## 3-1　かつて風水は国家戦略だった──栄光と転落の歴史

第2章では、「氣」という目に見えない秩序が、宇宙の創造から人間の意識、そして空間の設計にまで関与しているという思想を、多様な文化や科学の視点からご紹介しました。

そして風水とは、その氣の流れを読み解き、空間に応用する技術であると位置づけました。

すなわち風水は、単なる占いやインテリア術ではなく、宇宙観・人間観・空間設計を一体で捉える高度な“思想的実務”であるという理解を共有してきました。

では、なぜこのように深い体系を持つ風水が、今日では“迷信”や“非科学”と見なされ、時に胡散臭いものとまで言われるようになってしまったのでしょうか。

もちろん、誤解の積み重ねや一部の乱れた実務が影響している面もあります。

しかし、何よりもまず強調すべきは、風水がかつて“国家の根幹”を担う重要な戦略思想であり、為政者にとって不可欠な知識であったという歴史であったことを正しく語り直す必要があります。

風水は、もともと庶民のための学問ではありませんでした。

王朝の命運を左右し、国家の中枢に位置づけられた“国家機密”ともいえる知の体系であったのです。

その実務を担った者たちは、単なる易者ではなく、国家の存亡を左右する戦略家であり、空間の設計者であり、時に軍師でもありました。

彼らは「氣の流れる地」を読み、都を定め、墓所を選び、城を築き、あるいは戦の陣を敷きました。

為政者が風水を重視していたのは、決して迷信的な信仰からではなく、「氣の流れを制する者が、国をも制する」という現実的な知としての認識に基づいていたからです。

中国においては、古代より風水を扱う者は「地理師」とも呼ばれ、天文・地勢・人心を見通す術者として重宝されてきました。

代表的な人物が、漢の開祖・劉邦に仕えた張良です。

彼は黄石公から風水と兵法を学び、山河の地勢を読み、劉邦を関中に導き、漢帝国の礎を築いたとされています。張良は戦略家としてだけでなく、都城設計や墓所の選定にも精通しており、その基盤に風水があったことは明白です。

また、蜀の軍師・諸葛亮孔明も地形や氣の流れを読み解くことに長けていた人物と言われています。

彼が用いた「八陣図」は単なる陣形ではなく、氣の流れを活かして人の動きや心理を制御する“氣の陣法”であったと伝えられています。孔明は戦場で風の方向を読み、地形の陰陽を見極め、伏兵を配置するなど、風水的観察を軍略に応用したと伝えられています。

赤壁の戦いで東南の風を呼んだという逸話も、風水的象徴を強く帯びた伝承と言えます。

史実としては、火攻めの戦術を用いたのは周瑜であり、孔明が風を“呼んだ”という描写は、後世の小説『三国志演義』による脚色ですが、だがその創作が語り継がれてきた事実自体が、「風水とは風と氣を読む技術である」という思想を民衆が受け入れていたのも事実です。

つまり、たとえそれが史実でなくとも、風を読む者が時代を動かすという思想が、中国人の深層に刻まれているのです。

さらに、西晋時代の郭璞（かくはく）は『葬書』を著し、「氣は風に乗れば則ち散り、水に界せられば則ち止る──故にこれを風水と謂う」という有名な言葉を著しました。

この表現は、後世の風水思想に決定的な影響を与え、皇帝陵墓や都市構造の基本理論として活用されるようになりました。

時代が下って明の建国期には、劉伯温（りゅうはく）という風水と占術に通じた軍師が、初代皇帝・朱元璋を補佐し、首都南京の都城配置を風水の観点から設計したとされます。彼は軍略と風水を結びつけ、敵の侵攻を氣の流れで封じるような都市構造を考案したとも言われています。

そして日本においても、風水思想は早くから国家設計に組み込まれていきます。

奈良・平安の時代には、都市設計に四神相応の原理が応用されており、特に平安京におけるその地理配置は象徴的であり、北に玄武＝船岡山、南に朱雀＝甘南備山（およびその間にあった巨椋池）、東に青龍＝大文字山、西に白虎＝西山を配し、氣の流れを都市の中に収める理想的な構造となっています。

戦国時代に入ると、武将たちが築城に風水を応用するようになり、加藤清正はその代表例であり、熊本城の縄張りには氣の流れを考慮した設計が数多く見られます。

また徳川家康は、江戸の都市構造に陰陽道や風水思想を取り入れ、日光東照宮から江戸城へと至る龍脈を意識した配置を整えています。

富士山と江戸を結ぶ氣の流れを都市の背後に据え、天下泰平の象徴としたその設計は、風水が国家の礎となっていた時代の最後の輝きだったのかもしれません。

このように、かつて風水は国家戦略と深く結びつき、国を治め、民を導くための“中枢技術”であって、風水師とは、占い師ではなく、「氣の読み手」であり、「空間の設計者」であり、「国家戦略の参謀」だったのです。

次節では、なぜそのような中心的知識が「迷信」へと転落していったのか──“氣”という力の本質と限界、そして現代社会がそれをどう受け止めてきたのかを見ていくこととします。

コラム：都市にひそむ風水──江戸・東京に刻まれた氣の構造

風水は、決して古代中国だけの遺物ではありません。日本においても、特に江戸や東京の都市設計には、風水の思想が深く息づいています。

たとえば「江戸五色不動」（目黒・目白・目赤・目青・目黄）は、五行思想（木・火・土・金・水）に基づいて、江戸城を中心に五方位に不動明王を配したとされます。これは都市そのものを氣の結界で囲い、守護するという意図があったと考えられており、当時の都市設計に風水的な構想が組み込まれていた証とされています。

また、江戸城（現在の皇居）には「富士山からの龍脈を受け止め、外堀・内堀で螺旋状に氣を巻き込み、天守閣に集約する」という説があります。

これは古文書に明確な記述があるわけではありませんが、都市構造や地形の一致から、風水研究者の間で注目されている考察の一つです。

さらに、徳川家康のブレーンであった天海僧正らが、江戸城を中心とした陰陽五行の調整や鬼門封じの社寺配置を行った記録も残されており、単なる都市計画ではなく「氣の操作」という意図があったことがうかがえます。

一方で、近年インターネット上では「山手線と中央線が太極図を模している」という説も見られます。

山手線の円形が太極の渦、中央線が陰陽を分ける軸にあたるという解釈ですが、これは鉄道会社の公式な設計意図に基づくものではなく、あくまで都市伝説の域に留まります。

それでも、都市という巨大な構造体が人智を超えて“氣のかたち”を帯びていくという現象は、偶然の一致であっても風水的な感覚に近いものがあると感じられます。

東京を例に挙げましたが、この都市は第二次世界大戦で壊滅的な空襲を受けたにもかかわらず、戦後わずか数十年で世界有数の大都市へと復興を遂げました。この驚異的な再生力の背後には、果たして都市そのものが持つ「氣の流れ」が関係していたのか──それを科学的に証明することは困難ですが、東京という都市には人や経済を引き寄せ、何度でも立ち上がるだけの“氣の器”が備わっているように思えてなりません。

このように風水は、過去の遺産ではなく、現代都市においてもなお息づいている“空間の知恵”なのです。

この他にも、都市に刻まれた風水的痕跡は数多く存在しますが、本書では紙面の都合上、すべてを紹介することはできません。

ただし、ここで強調したいのは、風水が「昔の迷信」ではなく、都市の秩序や氣の流れを整えるために活用されてきた“空間哲学”であるという視点です。